

巻 頭 言

子ども学科開設記念号の刊行に寄せて

学 長 佐々木 公 明

このたび「子ども学科開設記念号」を刊行することを共に喜びたいと思います。子ども学科の開設に伴い尚絅学院大学は文字通り四年制大学に移行することとなりました。短大においても研究は重要ですが、四年制大学での教育内容の高度化に応じて教員の研究活動は益々重要になり、その成果を教育へ反映させることが制度的に要求されているといえます。余談ですが、「子ども学科」の英訳候補として、当初 Department for the *Scientific* Study of Children という“科学的”の形容詞を入れたものが提案されました。短大時代よりはより専門的に、より深く、より厳密に子どもに関する研究を行うという学科の教員諸氏の意気込みが感じられました。

「紀要」はその大学の研究活動水準と研究成果を端的に表現するものです。分野によっては、最先端の国際ジャーナルや厳密なレフェリー制を敷いている学会誌だけを重んじ、大学で発行している「紀要」を見向きもしない向きがありますが、天に向かって唾する行為になると思います。勿論、国際ジャーナルに掲載することを目標に研究を行うことは尊い事であり、本学もすべての教員にそれを強く奨励しています。幸いにしてその研究者の論文が国際ジャーナルに掲載されたならば、社会はその研究者の業績リストから、その個人の高いレベルの研究活動を知り、それを生み出す研究環境を提供している尚絅学院大学をも評価することになります。一方、「紀要」そのものが尚絅学院大学の全体的研究活動の質と水準を表現します。社会は「紀要」を重要な評価材料としていることを改めて銘記する必要があります。私たちは、国際ジャーナルと「紀要」の双方を重視する、「中庸」の姿勢が必要です。すべての教員が少なくとも3年に一度は「紀要」に論文を掲載して欲しいと思います。教育大学としての本学の場合は、特に「紀要」の評価が教育の評価に繋がりますので、「紀要」の水準向上はとても大切です。

「中庸」といえば、本学の教育モットーである「衣錦尚絅」の句がある『中庸』第19章は、(道徳に志して大学に学ぶ)君子たるものは外面を飾るよりも内面を修めるものであることを教えていますが、次のような句が続きます：

君子之道、淡而不厭、簡而文、温而理、知遠之近、知風之自、知微之顯、可与入徳矣
「君子の行なう道は、あっさりとして淡白でありながらいつでも人を惹き付け、簡素でありながら文彩があり、おだやかでありながら条理がたっている。遠い所のことも近くから起こることをわきまえ、一般の風俗にもその根本の原因があることをわきまえ、微かなことほどかえって明らかになると知って、何事も身近な地味なことから始めれば、進んで徳の世界にはいることが出来る」(金谷治訳)。私たちが「紀要」に論文を掲載する姿勢に通じるものがあります。